

新 年 に あ た っ て

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 戸町義次

植調研究所が新しく竣工した。鴻巣の研究所の移転であるが、面目は一新した。自然科学のなかでも生物の研究は、実物を見ることによって理解が早い。除草剤や生育調節剤に対する植物反応を知るには、実地に経験するに限るとの見地から、本協会設立後8年目に鴻巣に研究所を開設したのは卓見であった。隣接の農事試験場の専門家の指導や協力を得られた利点もあって、除草剤や生育調節剤の開発に貢献した程度は計りしれぬものがあり、思えば功多き施設であった。

除草剤や生育調節剤の発展が目ざましくなるにつれて、研究所拡充の要望が高まり、これに应运て牛久移転となったのである。施設そのものからいえば鴻巣の旧研究所は貧素であり、牛久の新研究所は豊かである。研究が施設に比例するなら、新研究所は従来に数倍する能率がある筈である。鴻巣の旧研究所は、施設の割に良い成果を収めたと思う。それは施設の貧弱なものを研究者の努力で補う意気込みがあったからである。またこのような条件の下に働く研究者に対する外部の思いやりのあったのも事実と思う。

鴻巣の旧研究所時代の心構えをデラックスな新研究所に持ち込むなら、その成果は期して俟つものがあると信ずる。ところが人間はお互いに勤勉と怠惰、愛と憎、祝福と嫉妬を同時にもち、悲しい本性の所有者である。しかも逆境において勤勉・愛・祝福が、順境において怠惰・

憎・嫉妬が生じ易いという傾向のあるのも、しばしば経験するところである。かゝる人間の弱点を認識し、その弱点を労わり合ってこそ、誠意が伝わり、信頼が生まれ、研究成果が上がり、研究所や協会の発展が可能となるのである。

以上は主として精神面のことであるが、もう一つ大切なことが経済面にある。それは施設が大きく立派になると維持経費が加速度的にかさむということである。建物の大きさに比例して維持費の増えるのは当然であるが、研究能率をあげるに必要な諸装置はすべて光熱水料を食うことを認識し、その使用を合理的に心がけるか否かによって経費に大きな差を生ずることを知ってほしいと思う。さらに注意すべきは暖房や照明が便利になると、その便利さに慣れてとかく必要以上の冗費に流れ易いことである。

新研究所の建設は、われわれ職員のみで努力によってできたのではない。関係官民の協力があったからこそである。これら官民関係者はひとしく研究所の成果を待望しているのである。これに応えるためには資金を有益に使用して、研究一途に能率をあげねばならぬ。

今、協会は物価と人件費の高騰に苦しい事情にあるが、研究の成果さえ出ればこんな苦境は一気に吹き飛んでしまう。謙虚に誠実に試験研究を進め、農民を幸福にするを目的とする農学の一翼を荷って、稔り多き年にしたいと願う。